【地域活動】

大木農園

「大木農園」とは、戸塚を含め横浜地域に畑を持つ、有機農家の大木敏幸さんのもとで、苗の植え付けや、野菜の収穫などを体験させていただく活動である。活動のきっかけとなったのは、2009 年に推進された「エコキャンパス計画」である。この計画において、「地産地消」という目標が掲げられ、大木さんと協力するようになり、学生と大木さんとの交流が始まった。学生には大木農園での経験を通して、野菜がどのように作られているのか、農業には具体的にどのような苦労があるのかといった普段あまり意識しないことに、目を向けてもらえるよう願っている。

2014 年度の大木農園の活動は、ジャガイモ植え、トマトやイチゴの苗植え、草刈り、ビニールハウスの解体、ジャガイモやサツマイモの収穫等、多岐にわたった。以前に「草刈りが多い」と参加学生から言われたこともあったが、この年はそのようなことはなく、様々な作業を体験できた。明るい雰囲気の中、参加学生と共に農作業を行い、休憩中は大木さんと野菜や農業、人生について話をした。一般の学生が参加できるので、学部や学年という枠組みを越えて、互いに関われる活動であった。作業は毎回一日で、大変な時も多かったが、終わった時の達成感は大きく、参加した学生も、「疲れたけど楽しかった」「参加してよかった」と言ってくれた。

課題点は、草刈りが多い、参加人数が非常に少ない日がある、といったことである。草刈りの問題だが、上述した通り、大木さんの配慮で草刈りのみの日は殆どなく、ジャガイモの収穫などの活動が増えた。この問題は解決したと考えている。しかし、参加人数の少なさという問題もある。５、６人の学生が来てくれることもあるが、担当１人のこともある。人数があまりに少ないと、作業の負担も大きくなってしまうし、大木さんにも申し訳ない。まだ解決には至っていない。

ジャガイモの植え付け作業（４月）

ジャガイモの収穫（８月）

（学生メンバー　文学部英文学科）

COT

COT とは、Center Of Totsuka（戸塚の中心）の略で、戸塚地域を学生の力でもっと元気にしたいというコンセプトのもと昨年度誕生した企画である。昨年度同様、地域のイベントに参加しながら、今年度は『地域情報 COTOWN ～戸塚がとっても好きになる～』（以下『COTOWN』と表記）の作成をおこなった。

昨年度、さまざまなイベントに参加し、戸塚地域で活動してみて、より多くの若者が地域のイベントなどに参加し地域で過ごすことが、戸塚を活性化させるために必要なのではないかと考えた。しかし、若者のほとんどが、出かける際に鎌倉や横浜へ行ってしまう現状がある。そのような若者を地域に呼び込むためには、戸塚の魅力を伝えることが重要だと考えた。戸塚の情報が載っているフリーペーパーはいくつあるか。しかし、どれも大人が作っているものであり、若者目線で作られているものはなかった。そのため、若者が魅力的だと考えるであろう情報を、若者である私たちがダイレクトに伝える『COTOWN』を作成した。

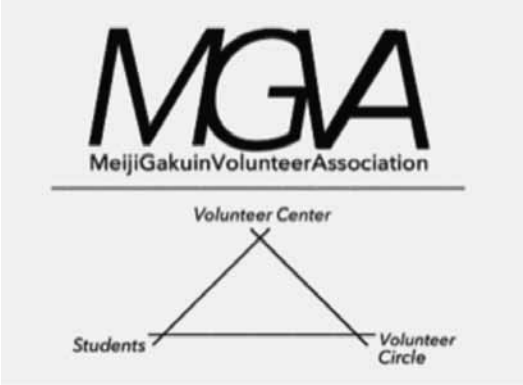
作成するにあたり、「とつか夢結び応援事業補助金はじめの一歩コース」に応募し、戸塚区から計 8 万 2,950 円をいただいた。それでも足りない費用は、取り上げた取材先から協賛金という形で援助していただいた。いずれも自分たちの活動の目的や思いに援助していただくことができたと考えている。製作期間は 2014 年 4 月から 9 月にかけてであり、取材、編集、業者に委託しての製本作業を行った。そして、完成した『COTOWN』は、戸塚区内の高校や大学での配布を中心に、戸塚区役所内でおこなわれたとつかお結び広場や、取材先にも置かせていただいた。「こんなところあったんだ」や「今度行ってみたいと思う」などの反響をいただき、目的を達成できたと感じている。一方、地域に何年も住んでいる方には「全部、知っていた」と新鮮味のないものとなってしまったようだが、それだけ戸塚のポピュラーな魅力を発信できたのではないかと考えている。

『COTOWN』製作の活動だけでなく、昨年度も参加したスポーツレクリエーションフェスティバルやとつかお結び広場にも参加し、戸塚区内での地域交流も積極的に行った。地域の人との世代間交流ができた一方、私たち以外に若者の数は少なく若年層の地域社会へのに参画が、まだまだ珍しいことなのだと感じた。そのため、今後は今年度の活動を活かし、戸塚の魅力を更に発信しつつ、若者が参加できるような地域のイベントの広報、及び企画や運営を行い、より若い世代が地域に入っていけるような環境を作っていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会学科）

MGVA（Meiji Gakuin Volunteer Association）

明治学院大学にはたくさんのボランティアサークルがあるが、それぞれのつながりは薄かったため、お互いの理解を深めようと、ボランティアセンター内にMGVAが作られ、2012年4月から本格的に活動している。



MGVA 概念図

MGVAでは、

1．ボランティアセンターとボランティアサークル

2．ボランティアサークル同士

3．学生とボランティアサークル

という、3つの“つながり”を強めることをめざしている。

今年度は、2013年の12月から2014年4月にかけて、ボランティアサークル・ボランティアセンター各セクションの紹介パンフレット「Volunteer Center X Volunteer Circle（VCVC） 2014」を作成した。この冊子作成の目的は、大学内にある数多くのボランティアサークル、またボランティアセンターの各セクションの紹介を一冊にまとめたパンフレットを作成し、それを4月に入学してくる新入生やボランティアに関わってこなかった学生へ向けて配ることで、明治学院大学における「ボランティア活動」の認知度を上げ、より多くの学生にボランティアサークルへの加入やボランティア活動への参加を促すことを目的としている。

VCVC 2014

また、同パンフレットには全16団体のボランティアサークルの対談式のインタビューも掲載。サークルの紹介だけでなく、そのサークルに入ったきっかけや活動の詳細を聞くことで各サークルの「今」を伝えることができた。

10月には、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」に応募し、活動奨励金をいただくことができた。今後は、この奨励金やこれまで培ってきた各サークルとのコネクションやノウハウを活かし、新たなインタビュー冊子を発行する。そして、その冊子にリンクした写真展の開催を2015年4月に予定しており、これによって大学内の学生による社会貢献活動の活発化、また、明治学院大学のボランティア活動の更なる広がりを期待している。

（学生メンバー　法学部法律学科）

MG 子ども

【活動経緯】

MG 子どもは、学生メンバーや一般学生の、将来子どもに携わる仕事に就くこと、あるいは子どもと関わり自らの視野を広げたいと考えている人たちの希望に応え、2011 年度から始まった活動だ。2012 年度から本格的な活動を展開させ、一般学生の募集をおこなっている。

【活動方針】

MG 子どもの活動方針は、まず保育園の業務を手伝わせていただき、子どもを預かる立場について理解を深めることである。次に、学生が子どもたちと交流するきっかけを作り、学生・子ども双方にとって得るもののある活動をおこなうことである。

【活動内容】

活動先は、川上保育園と、戸塚区地域子育て拠点「とっとの芽」の 2 カ所だ。どちらの企画も、少なくとも月に 1 回は活動をおこなっている。

川上保育園での主な活動は、職員の方のお手伝いとして、園庭の整備や運動会、七夕の準備などである。子どもとの交流では、外では縄跳びや砂遊びなどし、室内では絵本を読んだり、おもちゃを使って一緒に遊んだ。また、特に園庭の整備について、職員の方からとても助かったと感謝していただいた。子どもたちは、活動を重ねるごとに私たちの顔を覚えてくれ、「次はいつ来るの？」という言葉をかけてくれたり、顔を見るだけで駆け寄ってきてくれたりし、とても嬉しく思った。

とっとの芽では、室内の清掃から始まり、広場で子どもとおもちゃを使って遊んだり、おままごとをして過ごした。夏には室内にボールプールを出したり、プラレールを作って子どもたちと遊んだ。また、双子・三つ子の会や手話の会などを定期的に開催しているので、さまざまな方たちと出会うことができた。

2014 年度の活動は、川上保育園では 20 人、とっとの芽では 18 人の学生が参加し、とても有意義な時間を過ごすことができた。

【展望】

今後の展望としては、まだまだ当企画のことを知らない学生が多いと思うので、一般学生への周知活動に力を入れていきたい。また、活動に参加してくれた学生が「次も企画に参加したい」と思えるような、魅力ある活動ができるよう努力していきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

ボラフェスタ in KANAGAWA 活動報告

【活動目的とその内容】

ボラフェスタとは、日本赤十字社（神奈川県赤十字血液センター）と県内の大学のボランティア団体が共同でおこなう献血推進及び参加団体の活動紹介を目的としたイベントである。今年は 10 月 18 日（土）に横浜の日本丸メモリアルパークで開催された。

準備期間は 7 ヶ月と長く、会議を通して、目的に沿った活動ができるかを探り、ひとつひとつ確認しながら進めていった。その間、各団体の活動紹介や交流会などを通してお互いの活動について共有し、親睦を深めていった。今年は「献血勉強会」に参加し、献血基準などについて知ることができた。また、輸血用血液を検査する製造所を見学する貴重な機会を得ることができ、より一層献血について理解ができた。

本学の団体紹介に関しては、活動パネルの展示に加えて、学内で集められたボトルキャップを用いたボトルキャップアートをブース内で実施した。捨てられるボトルキャップを集めて業者に寄付することでワクチンができること、二酸化炭素の削減に貢献することができるということを来場者の方々に伝えた。

【活動の成果】

ボラフェスタの企画運営に携わり、一からイベント企画を行うことや献血活動を若年層に広めていくことがいかに難しいかを実感した。所属する団体の活動や学業と並行しながら、具体的な方針や内容を決めていく事は非常に労力を要するものであった。また団体同士の報告・連絡・相談を行うための日程調整なども同様である。しかし、他団体の方々と連携し準備をおこなったり、イベント内容を会議で考えることを通して、限られた時間の中でいかに互いに連携し合うことや報告・相談することが大切であるかを改めて知り、私にとって非常に刺激的な経験であった。

【課題】

今年度でボラフェスタ in KANAGAWA は幕を閉じるが、来年度からは東京都学生献血推進連盟と青年赤十字奉仕団の 2 つのボランティア団体が中心となり、ボラフェスタに代わる新たなイベントをおこなっていく予定である。今後も、長年ボラフェスタに携わった経験を活かして、明学レッドクロスと連携しながら、新たな企画の運営にも協力していきたいと思っている。

キャップアートを囲んで

（学生メンバー　文学部英文学科）

ペットボトルキャップ

ペットボトルキャップの回収活動は、貧しい国の子ども達にポリオワクチンを届け、またキャップを燃やす際の二酸化炭素（CO2）排出を削減することを目的としておこなわれている。横浜校舎に５か所、白金校舎に１か所の計６か所に回収ボックスが設置されている。これらのボックスからキャップを回収する作業を定期的に行っており、横浜校舎での回収量は、業者から受領書が届いたら、ワクチン相当数などをまとめてボランティアサークルのエコキャンパスミーティングと共にSNSを通して情報を発信した。今年度の６～７月には、ポリオワクチン32本に相当する30kgのボトルキャップを回収した。来年度以降取り組みたいのは、白金校舎と横浜校舎の連携である。回収ボックスは両校舎に設置されているが、回収量の情報発信は横浜校舎の分のみである。回収している両校舎で連携し、より多くのキャップを回収することにつなげたい。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

倉田小学校

倉田小学校では、地域とのつながりを深めるため、また小学校の児童と大学生がお互いに学びを深めるための活動を行っている。今年度行われた活動には、田植えや運動会でのお手伝い、個別級での学習支援活動や地域で行われた防災訓練時の子どもたちの見守りなどがあった。

今年度は、横浜地域活動の学生メンバーが少なかったこともあり、現在はボランティアサークルのOPENROOMのメンバーと協力して活動をおこなっている。なかには将来に繋がる学びを得ることができたというメンバーもおり、運動会などでの活動時には大きな道具を子どもたちに怪我の無いように安全に運搬する手伝いをできたことなど多くの成果があったと思われる。

現時点での課題は、今後どのようにOPENROOMと協力していくかである。現在は連絡担当と活動担当で役割分担をしているが、伝達の効率に問題が生じる可能性もあり、メンバーも新しくなっていくのでこの点について検討が必要である。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

どうせ登校するなら

この活動は、戸塚駅から横浜校舎までの通学路をごみ拾いしながら登校する企画であり、名前のとおり「どうせ登校するなら、ただ歩いていくだけでなく、＋αしながら登校しよう」というコンセプトで実施している。ごみ拾いやすれ違う人たちに挨拶をしながら登校することで、地域交流につながったり、普段出会うことのない他学部や他学年の人たちとの交流の場になったりしている。

またこの活動は「ごみ拾い」というシンプルなもので、「ボランティアを始めたいけど、何をしたらいいかわからない」という学生が気軽に参加しやすい企画となっている。

今年度は、運営側の人数不足により活動回数が少なかったが、この企画のような「ボランティア活動への入口」的な役割を担う活動は、今後も必要だと感じている。広報の仕方や、活動内容の充実を図り、よりよい活動につなげていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

高輪いきいきプラザでのおりがみ開放

【活動内容】

今年度より白金地域メンバーが中心となり、高輪いきいきプラザでの折り紙を媒体とした交流活動を展開した。これは、いきいきプラザが実施する介護予防事業を明学生とコラボすることによって、学生と地域のつながりを拡大することを目指したものである。

活動初年度となった今年は4月～6月、8月～10月、12月～2月の3クールで活動を行った。隔週の第1、第3土曜日に、高輪いきいきプラザの敬老室で毎回10名程度の高齢者が集っており、学生ボランティアは毎回3人から最大6人程度参加していて、高齢者との折り紙を楽しんでいた。折り紙づくりの作品は施設職員が用意をし、季節折々の内容が提供されていた。また高輪いきいきプラザの地域交流事業の一つである「ほのぼの作品展」では利用者とボランティア学生が一緒になって創作し、色とりどりの作品を作り上げていた。参加してくれた学生からは「高齢者というイメージが大きく変わった」「おりがみを通して世代間交流ができ、昔の話や世間話なども自然に出来て良かった」など毎回楽しみにしてくれている学生も多い。また今年度はこのボランティアに参加し感銘を受け、将来高齢者福祉を勉強して働きたいという学生もいた。高輪いきいきプラザは介護予防を目的にしている地域コミュニティセンターなので、基本的に元気な高齢者が多いため、学生が元気を与えるだけでなく、高齢者から元気をもらう事も多い。そのような視点から高齢者福祉を学ぶ機会としても、空間を提供している。

【成果と反省・課題】

このプロジェクトは、学生を呼び込むようになってから人数も増え、活気に満ち溢れるようになった。ボランティア学生も増え、現在総勢で20名となり、若い学生の参加は施設利用者の楽しみの一つになっている。今後はよりさまざまな方に来てもらえる様に折り紙のバリエーションを充実させ、学生にも企画づくりに参加してもらおうと考えている。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

山黒

【活動内容】

「500円（ワンコイン）でココロもカラダも温まろう@白金」をコンセプトに、月に1度、障がい者グループホーム『レインボー白金』にて、料理教室＆交流会を行っている。グループホームの職員の方一人に「匠」になっていただき、旬のものの美味しい食べ方や料理の技術を教えていただく。料理教室の中でできたお料理を、レインボー白金のみなさん、地域のみなさんと歓談をしながらいただく活動である。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

MG パール

【活動目的】

私たちは、マレーシアボルネオ島の野生動物を絶滅危機から守ることを目的とした活動に取り組んでいる。ボルネオ島は地上生物種の 70%が生息すると言われる。しかし、1980 年代からパーム油採取のために油ヤシのプランテーションを開始したことにより、森林が破壊され生物多様性は徐々に失われている。その問題を知った私たちは、ボルネオ島で新たな森を育むために、キナバタンガン川沿いのプランテーションの土地を購入する活動をしている。そのための手だてとして、ボルネオ島の淡水パールを使った手作りのアクセサリーを販売し、その売上を NPO 法人ボルネオ保全トラストジャパン（BCTJ）に寄付をしている。アクセサリー作りや購入を通して、多くの人にボルネオ島と私たちのつながりを理解してもらうこともねらいの一つである。

【活動内容】

今年度は白金と横浜の両校舎でそれぞれ週に 1 回活動をした。活動はイヤリング・ピアスなどのアクセサリー作りやボルネオや世界の自然環境について学ぶ勉強会を開催した。イベントなどでの売上金は 50%を BCTJ に寄付（ボルネオ島の森林保護費用に充当）、30%をイベント出店費、20%を材料費というように割り当てる。今年度の活動内容を表にまとめた。また、今年度の合計寄付金額は 11 万 3010 円であった。6 月の講演会では BCTJ の理事長である坪内俊憲氏を招いて、ボルネオ島の現状などについて理解を深めた。講演会参加者には、MG パール以外の学生やツイッターでの発信をみての学外からの参加者もあり、反響が感じられ手ごたえを感じることができた。講演後に参加者に書いていただいた意見を見ると、みなさん自然環境について関心を持ってもらえたことがわかり、よい影響を与えられたと感じた。8 月にはオープンキャンパスで高校生にボルネオ島の現状や私たちの活動を説明し、ボルネオ島の淡水パールを使用したブレスレット作りの体験をしていただいた。10 月には約 120 団体が参加した「よこはま国際フェスタ」というイベントに出店した（写真）。このイベントでは他の参加団体から展示や接客方法などの刺激を受け、よい経験となった。

よこはま国際フェスタでの活動のようす

表　2014 年度ＭＧパール活動

5月	戸塚まつり	10月	よこはま国際フェスタ
6月	キャンドルナイト	11月	白金祭
	講演会	4月～7月	生協販売
8月	オープンキャンパス	9月～12月	生協販売
9月	夏合宿		

【反省と課題】

寄付金額を伸ばすためには販売時に信頼性と説得力のある説明が必要である。そのため、来年度はメンバー内で勉強会を行い、販売時にきちんと説明できるようにする。

（学生メンバー　心理学部心理学科）

白金キャンパス近隣での防災活動の取り組み

地域防災の現場で活動している方たちにお話を伺うと、「防災の現場にはもっと若い力が欲しい」という声がたくさん聞こえてくる。一方、学生の防災意識は十分ではない。地域につながりがないため、もし大学で被災したら、多くの学生が自分の身さえ守ることができないであろう。そのような状況に危機を感じ、防災や地域をもっと身近に感じて欲しいという意識を持った学生が集まり、動き出したのがこの活動である。

学生の問題意識を行政の立場で地域防災に取り組んでいる港区高輪支所協働推進課に相談したところ、共感して頂き、港区が主催する総合防災訓練に学生ボランティアとして関わらせて頂くことになった。

今回は学生に防災活動や地域に興味を持ってもらうきっかけを作ることが目的であった。そのために、ボランティアを前面に出さず、企業とリンクさせた企画づくりをした。具体的には、防災訓練に参加する企業に協力を依頼し、その企業が扱う防災用品の紹介の手伝いを学生がおこなうことを計画したところ、８名の学生が参加してくれた。防災訓練の様子は、どの学生も企業と連携をとり、活動を通して地域の人との距離を近づけていた。高輪支所の方々からは「防災訓練に活気が生まれ、参加者も喜んでいた」とお褒めの言葉を頂いた。学生にとってもはじめは企業にしか興味がなかったようだが、地域の方々と触れ合うことで、自身も地域の一員であるという自覚が生まれ、地域や防災に興味を持つきっかけになったと思う。

災害はいつ発生するかわからないことを考えると、この地域防災の取り組みは、大学内でも継続的に進めていかなければならない。今後の課題としては、いつ起こるかわからない災害に対してどのような体制で活動を進めればよいかということであろう。明治学院大学は、これまで被災地支援に力を注いできたが、災害に強い大学を作るためにもこの活動は欠かすことのできないものとなるであろう。

防災グッズを扱っている企業の方と

学生が来場者の受付も担当しました

（学生メンバー　法学部政治学科）